



さらしな の 里



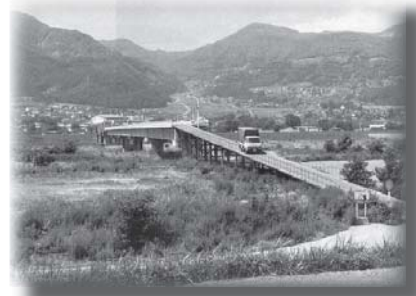
友の会だより

第19号

2008・秋



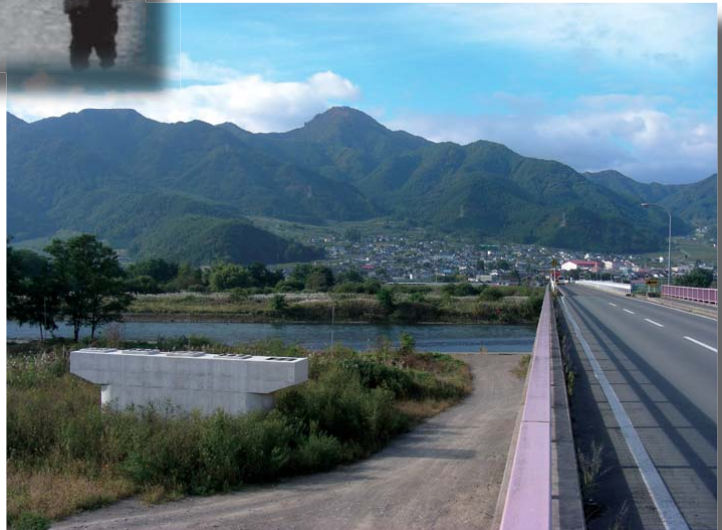
初代の冠着橋。吊り橋だった



板敷きの取り付け橋の時代



洪水の歴史を物語る橋脚



全面架け替えを待つ現在の冠着橋

冠着橋全面架け替えへ

冠着山・更級の里を眺める場所で私が一番気に入っているのは千曲川にかかる冠着橋。仕事の疲れを癒してくれる。

更級村が戸倉と五加と合併して戸倉町となつて間もなくの昭和三十三年(一九五八)、町が建設したこの橋の名前を一般から公募した。私は締め切りの日に「冠着橋」と書いた紙を持って駆け込んで入選。六月七日に橋の渡り始めがあり、当時の町長、米沢嘉久太さんより橋名の入選に対して賞状・賞金をいただいたのだ。橋名は「嘉久太」が一番多く、「冠着橋」は三名だったそうである。

昔は更級村と五加村を結ぶ渡船場があり、村人の往来だけでなく、特に五加の人にとっては冠着山から薪を取って運ぶのに利用されたところだった。思えば昭和三十六年、屋代木材に勤務、毎日、自転車通勤、冠着橋を渡り勤めていた。会社の帰りは、橋の上で自転車をとめて、四季に変わる冠着山を眺め古代、官人にうたわれた更級の里を偲びながら家路にいったのだ。

当時の橋は五加村側は堤防までつながっておらず、水の流れがない河川敷に板木を敷き並べた取り付け橋でつながっていた。台風で大水になると、いつも流された。道幅が五加村に向ってだんだんと広くなっているのは、災害復旧工事がそのたびに行われたせいである。

冠着橋と名付けてから思えば半世紀が過ぎている。戸倉町はさらに上山田町、更埴市と合併し、千曲市となった。更級側のたもとの部分は大型車は通れない一車線、平成十九年度より、国などから予算が毎年おり、全面架け替えが予定されている。国道18号バイパスもやってくる。冠着橋も新しく生まれ変わるのだ。姨捨伝説、月の名に立つ更級の里。市民はもとより、冠着橋を渡り、旅人も訪れるよう望みたいと思います。

(仙石区・小松康孝)



明るく元気にぱーっと 未来を見つめて

眼下に広がる長野盆地、そこを流れる白く輝く千曲川、視線を平らに保てば遠方に連なる北信濃の山々、額の汗を拭いながらこの絶景にどれだけ癒されたことか。

姨捨から吉野、原、御麓と続く段々畑と棚田が、最近では景勝地として話題をさらっています。この地が美しいとするなら、それは外観だけではなくありません。むしろ、この厳しい傾斜地を歯を食いしばって困難を克服し耕し続けてきた先人の労働の日々とその生き様が美しいのであります。今に生きる私たちは、そうした先人たちの誇りと受け止めています。

このたび、羽尾五区では盆踊り改

羽尾五区では今年の夏の盆踊りで、新しい音頭「ごくんぱ」を創作し、郷嶺山の広場でみなさんと踊りました。羽尾の地形と歴史を踏まえた歌と踊りで、好評でした。盆踊り改革委員の上水清さんに報告してもらいました。

新しい盆踊り「ごくんぱ」 羽尾五区が創作、郷嶺山で披露

羽尾五区は山坂の集落です。「ゆずり葉」などの遺跡に見られるように、縄文人が最初に住み着いた地域でもあります。しかし、決して農耕に適した地であったとはいえませんが。よって、農業集落として開発されたのはずっと後になります。

山の斜面を切り開き、耕し続けることは容易なことではありません。斜面に踏ん張り、鍬を振るい、重い荷を背負う労働の日々には想像を絶するものがあつたのです。

革実行委員会なるものを立ち上げ、低調となつてしまつた盆踊りの改革に着手しました。私たちの誇りとする先祖の御霊をお迎えし、感謝の誠をささげつつ、その御霊を背負つた交流の場を、活気ある楽しいものとするためであります。五区独自の歌と踊りを作りました。「羽尾ごくんぱ音頭」と「羽尾ごくんぱ踊り」です。五区の皆さん明るく元気にぱーっと踊ろう未来を見つめてぱーっとね。これが「ごくんぱ」の由来です。

奥深い小さな山里のささやかな試みです。多くの人たちのご協力を得て、これまでを大幅に上回る参加者を得て今年の盆踊りは終わりました。左の歌詞は盆踊り改革実行委員会が例として作ったものです。区民のみなさんに今後、さまざまに歌詞を作ってもらえればと思います。

羽尾「ごくんぱ」音頭の歌詞の例

五区盆踊り改革実行委員会

- 1、 こんな坂 なんだ坂 こんな坂なんだ坂 こんな坂
- 2、 五区の 皆さん ごくんぱ踊りを 踊りましょう
- 3、 おうちのお母ちゃん 私をお尻に しかないで
- 4、 おうちのお父ちゃん お酒とタバコは ほどほどに
- 5、 先祖の 御霊を 背中に背負って 踊りましょう
- 6、 五区は 良いとこだ 坂が多いけど 見晴らしいい
- 7、 五区の人 良い人だ 人情こまやか 頑張りやー
- 8、 収穫 まぎわの もろこし食べる ハクビシン
- 9、 坂ですよー 坂ですよー こんな坂ー なんだ坂ー
- 10、 鍬で 耕す 段々畑 段畑
- 11、 郷嶺山 展望館 ソバのおいしさ 日本一
- 12、 御麓 みろーく 弥勒菩薩の おる一里
- 13、 朝日に 輝く 黄金の色の 原の里
- 14、 五区の 真中ー 新田集落 大部落
- 15、 由緒ありー 福招く 一つの神の 一ツ石
- 16、 棚田をー 見おろす 景色と美田の 青木
- 17、 二つの山と 吉野の田 そこに囲まれ 藤ノ木

(羽尾五区副分館長・上水清)

足の神様 アシオス、アショーサン



羽尾にお住まいの森正文さんから「アシオスという足の神さんが山の中にいる」と教えてもらいました。パシオスなら聞いたことあるけど、アシオス？ なんか宇宙人みたいな、土偶のようなイメージが浮かび、どんなものなのかとても知りたくなりました。

森さんは私の実家のご近所にお住まいの若林とも子さんから聞いたというので、若林さんに尋ねてみました。「うん、あるよ。アショーサンのことだな」。アショーサン？ さらに尋ねると、「足王さん」と

と書くんじゃないかとのこと。

若林さんの生家はその神さんのある山のすぐ下にあります。「これから山際にある畑の仕事に行く」というので、私も一緒に行き案内してもらったことにしました。

姨捨駅に向かいちようど旧更埴市との境界辺りで左に曲がって坂を上りすぐのところ、小さな林があります。手前に草が茂っていて中は見えませんが、その向こう側の林の中に鎮座していました。

自然石を組み合わせた祠の上に、くるぶし辺りから下の靴の格好をした石が二つのつかっています（上の写真の左）。手前には石の棒が並べられていました。なんとかわいいくて愛嬌（あいさう）があります。あながち宇宙人、土偶のイメージも外れていません。

「うちのばあちゃんがしょっちゅうお参りに行つた」と若林さんと言います。「ばあちゃん」というのは明治二十五年生まれの若林さんの実のお母さん。お母さんは信心深く、足が痛ければ八幡の武水別神社に行つて拝殿に置かれていた小石を借りてきては足をさすり、よくなつたら

善光寺平を一望



「治りました。ありがとうございませう」と言つて返しに行くことがあつたそうです。

この足の神様には、下の集落の方からも昔はよくお参りに来る人がおり、お母さんは見かけると、「帰りはうちでお茶飲んでつて

足休めるのに格好の山

なあ」と声を掛けていたそうです。

足の神様を祭るところとしては全国に「足王神社」がいくつもあるようで、足が丈夫であるようにと、わらじが奉納されているのが特徴です。当地のものは神社のような立派な体裁ではありませんが、鎮座している場所は上田から長野方面まで善光寺平が一望いで

きる抜群に見晴らしのよいところ（右の写真）。ここで足を休めるのは本当に気持ちがいいと思います。

だからなのでしょう。足の神様の近くには男女が横に並ぶ双体道祖神のお地藏さんのほかに「大聖観喜霊神」と刻まれた石も鎮座して、三本に枝分かれた立派な桜があります。広場的な空間です。

若林さんから情報提供を受けた森正文さんが見に行つたところ、やぶになつていたので、きれいに払つたのだそうです。

ちなみに大聖観喜霊神は「だいしょうかんぎれいしん」と読むようで、あらゆる障害を取り除き、智慧と成功を与える神様だそうです。裏面には奉納者として「明治十八年、若宮村西組 源氏 中村新左工門」と刻まれています。若

林さんによると、この

コクゼ山（虚空蔵山？）と呼ぶそうです。上の写真の桜の右にちよつとだけ顔をのぞかせているのが双体道祖神、左の奥にあるのが「大聖観喜霊神」です。塚田克巳さんに撮影してもらいました。

さて、これからこの足の神様をなんと呼ぶか。アシオス、アショーサン…

（大谷善邦）

おらほの冠着

19

山頂で御籠、ホタルが乱舞



千曲市のシンボル冠着山の頂上（標高二二五二メートル）に大権現様（冠着神社）が建立されており、毎年七月二十八日に冠着神社例大祭が執り行われる。例大祭の前日から翌朝までに行われることが「御籠」です。「御籠」とは、心身を清め祭りの準備を行うことで、大字羽尾の取締役五人が祭日の前日、七月二十七日に行う大切な行事です。

午後二時、千曲農協更級支所前に集合。空を見上げれば黒い雲が立ち込め雷が鳴り、今にも雨が降りそうな気配に挨拶もそこそこ出発。はじめに坊城平の鳥居の注連縄の張り替え、大急ぎで麻績側の登山道より

各人が分担した荷物を背負い山頂へ。雨の来ないうちに作業を終えなければと思うと、気はやるが荷物は肩にずっしりと重たいし、雷はますます近くで鳴るし、心臓も激しく鼓動を打つ。

いつもなら三十分くらいで登れるはずの道

のりがなんと遠く感じたことか。頂上に着くと休み間もなく昨年建て替えた鳥居と注連張石（各尊真の中央に注連縄を張り替える。そのころより雨が降り出す。こうなれば権現様の虫干しはできないので掃除も後回し。お宮の内側に張つてある注連縄を下ろし、外で同じ大きさ形に作り上げるころには、大変な雨が降り出し、皆すでに体は清められた。

出来上がった注連縄をお宮の内に張る。それから権現様の中に入り丁寧に掃除を済ませ、続いて土間も掃除。五人が眠るため有り合わせの板を置き、その上にゴザを敷き、入り口には風雨と寒さをしのぐためブルーシートを二重に張り終えたころには、午後五時半を過ぎていた。外は雷と大変な風雨で真っ暗。皆がもってきた懐中電灯で明かりを取り、しばらくひと段落。この間一服もせずによく動いたこと、昨年は外でブルーシートを敷き、下界を眺めながらお神酒をいただき心を清めた



が、とても外では無理。

午後八時ごろ、ようやく雨はやみ明るくなつたので外に出てみると、なんとなんと無数の螢が乱舞していた。あたかも姨捨伝説の、そして謡曲姨捨に出て来る「わたしはここに捨てられたのです」と語るがごとく、月の光を浴びて白衣の老女が舞っているような、不思議な雰囲気包まれたのは私だけだったろうか。そして昼間の激しく荒れた天候がうそのような深閑に包まれ、深い眠りに入りさわやかな例大祭の朝を迎えた。

この例大祭は安永七年（一七七八）、注連張石が上山田の人たちにより少し離れたところに向きを変えて建て替えられた事件が起き、訴訟を松代藩に起こしたが、羽尾の言いが通り、元の位置に戻され一件落着した。それ以来訴訟が決まった日を冠着大権現様の祭日と決め今日に至っている。

当日の朝、武水別神社の宮司様羽尾の氏子総代の皆様をお迎えし、滞りなく祭事を済ませ下山。郷嶺山に鎮座する里宮の観月殿において直会を行い、無事に終わることができ、一同ほっといたしました。

（主務祭典取締役・中澤厚）

編集後記 友の会だより第19号をお届けします。楽しく、勢いがあり、そしてためにもなる原稿をいただき、編集委員会もうれしい限りです。

歴史の経緯と積み重ねが目に見える形で残っている橋として冠着橋は貴重です。千曲川の更級地区側の堤防は今、散歩やサイクリングの名所。国道18号バイパスがはずれ、新冠着橋のたもとを通る計画が進んでいます。今よりもさらにさらしなの里を眺めるのもってこいのスポットになることを祈りたいと思います。

ごくくば音頭は上水清さんのもとに、テープがあるそうです。足の神様に参拝に行くには今はやぶがあつて難しい状況なので、森正文さんは「ちゃんと歩いて行ける道をつくりたい」とおっしゃっています。

御籠の時期に、冠着山頂でホタルが舞っているというお話には驚きました。いったいどこでこのホタルは育ち、現れているのでしょうか。ブナの木がなぜ、山頂に一本だけあるのかとともに謎です。

編集・発行

さらしなの里友の会より編集委員会

事務局・さらしなの里歴史資料館

〒三八九・〇八二二

長野県千曲市大字羽尾 四七の一

電話 〇二六（二七〇）七五一一

Fax 〇二六（二六二）四一六一